名古屋で初の物産展

凧とコシヒカリの里 越後・白根のお正月

一月四日から八日まで、名古屋三越・星ヶ丘店で行われた、新春恒例の初売りに併せて、市内の物産を一堂に集め、〝凧とコシヒカリの里、越後・白根のお正月〟と銘打って、「市総合物産展」が開催されました。

今回の物産展開催のきっかけとなったのは、昨年十一月中旬、名古屋三越から〝凧にちなんだ物産展を開催したい〟と市へ申し入れがあり、名古屋方面へ市の観光と物産を売り込む絶好のチャンス―と食料品やみやげ品を中心に出品者を募り、細部打ち合わせの結果、十二月上旬、同展示会への出品を正式に決定。特に、笹だんごなどは味を含めた日持ちをよくするため冷凍にするなど、工夫を凝らしての出品となり、出品物は、四団体十八社を合わせ百品目と過去最高を記録しました。

展示即売会初日の四日には、滝沢市長や出品者も出席し、星ヶ丘店長など展示会関係者とテープカットを行い、買い物客や関係者が見守る中、成功を祈りながらの幕開けとなりました。

初日から人気は上々で、中でも五百グラム入りのプレゼント品ともなったコシヒカリや、もち、梨、漬物、みそ、麩、笹だんごなどが凧とともに人気を呼び、期間中、本県出身者も含め三千人の人出となりました。

また、「この機会に物産だけでなく観光もPRを」と凧合戦のビデオコーナーの設置や写真展をはじめ、凧作りの実演も行い、会場を盛り上げました。

出品者は、今回の展示会で、味など品物に対する評価が高かったことに、自信を深め今後も機会があれば県外へも出品したい―と話し、今回の物産展示即売会が、販路開拓を含め、今後一つのステップになればと期待しています。

なお名古屋市内では、NTTの協力を得て、大凧合戦、対岸の笹川邸、角兵衛獅子のテレホンサービスを、一月三十一日まで行い、本市のPRに一役かっていました。

物産展テープカット

凧製作実演も好評

物産と観光もPR

チャリティーショーの益金 文化スポーツ基金へ寄付

白根市民謡連盟は、昨年十二月六日、文化・スポーツ振興基金への寄付を目的に「チャリティーショー」を開催し、参加した約二百五十人は、本市ゆかりの鏡五郎さんのワンマンショーやカラオケ大会などを楽しんでいました。

今回の益金約十万円は基金をつくる会に寄付されましたが、これまでに寄せられた基金は約四百七十九万円で、募金活動二年目を迎えた同会では、ますますのご協力を呼びかけています。

基金への申し込みや問い合わせは、教育委員会社会教育課（☎373・3171）へしてください。

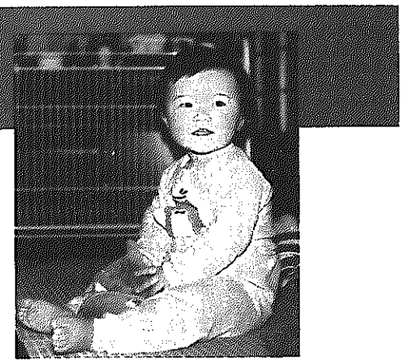
根高校の新柔道場が完成し、落成式

白根高校の新柔道場が完成し、鏡開きの一月十一日、来賓や柔道部員、先輩、父兄など同校柔道関係者約百五十人が出席して、落成式が行われました。

同校は県下高校柔道界の名門ですが、これまで剣道部との共同練習場でしたので、関係者が「新道場の建設を」と六十年度に県へ要望。このほど百二十七・五畳という県立高校では最もすばらしい道場が完成したものです。式典後、来賓など多くが見守る中、緊張した面持ちで、創部以来最もうれしい紅白試合を行っていました。

新柔道場の落成式終了後、先輩と喜びの紅白試合

わが家のアイドル



田中美夏子ちゃん（1歳5か月）
一弥さん・奈緒美さんの長女（魚町2）

竹の破裂音に歓声。大通で恒例の「さいの神まつり」

一月十五日、大通地区で恒例の「さいの神まつり」が行われました。

五回目の今回は雪のない中での開催となりましたが、好天に恵まれ、関係者も一安心。他地区からもおおぜいの人が訪れて例年にないにぎわいを見せ、無料の甘酒、わたあめ、焼きいもの前には長い行列が出来、三百本用意されたスルメもすぐになくなってしまうほどでした。

火が入り、すさまじい青竹の破裂音が響き出すと、集まった人たちは驚きの声を上げ、こわごわと近づいてスルメを焼いていました。

当日はテレビ局も訪れ、17日の番組で紹介

作りソリを寄贈 小林地区区長会

小林保育園では、朝早くから、昔懐かしいソリで元気に遊ぶ園児の姿が見られます。

このソリは、今年に入って泉健司区長会長から「各区長手作りのソリを贈りたい」と申し出があり、このほど板と竹で作った六台が届けられたもの。今年はあいにく雪が少ないのですが、それでも園児たちは、おじいちゃんからの心のこもった贈り物を使って、山から滑ったりして楽しんでいました。これまでにも、父兄から手作りの人形、お手玉などが寄贈され、園児たちからも喜ばれています。

雪が少なくても何のその。心のこもったおじいちゃんの手作りソリで元気に遊ぶ園児

思いやる心

地域社会とボランティア

横浜市に住むある障害者夫婦の世話を、二十四時間続けている若者たちがいます。コルダー・ファミリー（こころの家族）というこのグループは、夫妻の家に交替で泊まり込み、寝たきりのご主人（五十歳）を介助しています。

感心なことは、若者たちに全く気負いが見られないことです。例えば青年の一人は「この家にきて、みんな〝これはおもしろい〟とかからりと明るい人間関係は、どこからくるのでしょうか。それは、夫妻の明るく前向きな生き方と無関係でないと思います。ご主人は筋萎縮性側索硬化症という難病で、のどに穴をあけたところに管を通し、人工呼吸器に頼って息をしています。また、奥さんも進行性下肢障害のため、車いすを使っています。

奥さんは、声を出すことができないご主人の口の動きを読みとりながら、結婚以来六年、そばに付きっきりで世話を続けてきました。寝たきりのご主人もまた、奥さんの気持ちを思いやる優しい人でした。この二人の温かい夫婦愛に、若い仲間たちは心を引かれたのでしょう。

生命ある限り人生を問う

〝大事だ〟とか思って、時間と労力を提供しているんです。大義名分なんていらない。人と人とのつながりがすべて」と言っています。

心を引かれる夫婦愛

このような若者たちと夫妻とのつながりに、人間の原点を見る思いです。昨年八月、夫妻と仲間たちはワゴン車「あかね号」に乗って出発しました。

途中、さまざまな人との出会いと共感がありました。青函連絡船で修学旅行中の女子中学生とふれあい、暴走族風の若者二人の協力、そしてご主人は同じ難病で苦しむ人たちを見舞ったり、かつて介助してくれた若い仲間と会い、旧交を温めました。

困難な旅を通して得たものは、人間への限りない信頼と、生きることへの新たな確信でありました。

千五百キロの旅で得たさまざまな出会いと共感

そんな夫妻は、ずっと前から東北、北海道への旅を夢みていました。これを知った若者たちは、一般の人々にも呼びかけ、横浜・札幌千五百キロの旅を実現させたのです。

淑徳短期大学教授
前全国ボランティア活動振興センター所長
木谷宜弘